

(2) 研究報告①～③

「『これまでがどうだったかより、これからどうするのか』を大切にしていきます。」

宮城県気仙沼高等学校 教諭 羽田 周平

1. 気仙沼高校定時制の現状と生徒の変化

本校ではここ数年、急激な変化が訪れている。とりわけ入学してくる生徒の変化が大きい。かつては素行に課題がある生徒も在籍していたが、そういった生徒は全く見られなくなった。実際に直近5年間で特別指導の対象となった生徒はゼロである。その代わりに、中学校時代に不登校を経験した生徒の割合は急増している。直近3年間の入学生で、中学校時代の欠席日数の合計が30日以上の子の割合は、平成30年度入学生44%（9名中4名）、令和元年度入学生69%（16名中11名）、令和2年度入学生79%（14名中11名）となっている。なお、この中には別室登校や保健室登校していた生徒は含まれていない。また、発達障害の診断を受けている生徒や発達障害の疑いがある生徒も増えてきている。

こうした生徒の急激な変化に対して、本校として対応を迫られる中で取り組んできた具体的な事例を、最近5年間のものを中心に報告する。

2. 求める生徒像

「受験する皆さんの『これまでがどうだったかより、これからどうするのか』を大切にしていきます。」

これは本校の求める生徒像の中にある一文である。様々な変化が求められていたのと時期を同じくして、新入試制度における求める生徒像を検討した。これから気仙沼高校定時制がどのように進んでいくかを考えたときに、キーとなるメッセージがこの『これまでがどうだったかより、これからどうするのか』であった。これは様々な事情を抱えて入学してくる生徒に対して、我々教職員が対応する際の一つの指針とな

っている。

3. 具体的な取り組み

(1) 授業改革

本校では、「分かる授業」の実現に向けて、授業のユニバーサルデザイン化や学び直しの積極的な導入を行っている。

ユニバーサルデザイン化については、まず前面や側面に掲示物を貼らないようにするなど、教室環境づくりから始めた。また、授業については、①本時のテーマ、②本時の目標、③説明、④本時のまとめ、といった基本的な授業展開を教科に関わらず統一し、穴埋めプリントには『^① 』のように番号を振るなど、発達障害を含めた課題を抱えた生徒や学習の遅い生徒のためだけでなく、すべての生徒にとって分かりやすい授業を目指している。

学び直しについては、生徒の実態に合わせて積極的に取り入れている。中学校までの学習内容と高校の学習内容への接続を丁寧に行うことで、中学校時代に学べなかったことを学ぶとともに、生徒が授業内で「分かった!」と実感する場面を増やしていくことがねらいである。また、ICTも積極的に活用しており、視覚的にもわかりやすい授業づくりを進めている。

さらに、これらの導入及び充実に向けて、学校自主研修事業（特色ある学校づくり）を活用し、先進校の視察を行っている。平成28年度にはICT活用、平成29年度にはインクルーシブ教育、令和元年度にはアクティブラーニングをテーマに視察を行った。その後、全教員を対象に報告会や研修で情報共有を行い、授業づくりに生かしている。また、年に2回「授業互見週間」という期間を設定し、教員がお互いの授業

を見合い、意見交換している。この副次的な成果として、自分以外の授業を受けている生徒を客観的に観察することで、生徒の特徴やつまづきがどこにあるかを理解することに繋がっている。

(2) 「授業を大切にする」取り組み

本校では「授業を大切にする」をテーマに、教員は「分かる授業」で生徒を引きつける努力を、生徒はその授業に主体的に参加する努力を求めている。これを達成するために、これまで行ってきたが効果が少ないものをいくつかスクラップした。その一つが「家庭学習課題」である。次の授業までに課す通常の課題、教科が輪番で課していた週末課題、長期休業に課していた課題のすべてを廃止した。形骸化したものが多く、評価の仕方も曖昧だったので廃止を決めた。その代わりに生徒個人またはグループで行う課題を授業内で行っている。また、課題の廃止に伴い、長期休業明けの課題テストも廃止し、全校集会を行った後に通常授業を行っている。「やったほうがいい」で取り入れたものが多かったが、選択と集中の観点から、「授業を大切にする」ということを中心に考えて決断した。

教員にとっても生徒にとっても授業に対する負荷は大きいですが、生徒が授業や考査に臨む姿勢は年々良くなっている。授業を大切にすることが、生徒の学校生活の充実に繋がると信じて今後も努力していきたい。

(3) 教育相談体制の整備

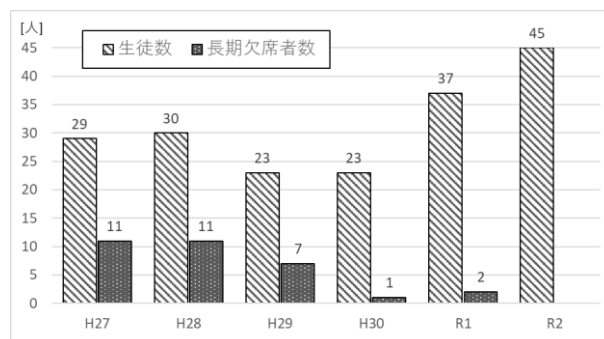
生徒の変化に伴い、教育相談の内容も多岐にわたっている。担任や一部の担当者に過剰な負担がかかったり、相談の内容の情報共有がうまくいかなかったりした時期があり、トラブルが多く発生した。それを受け、①まずは担任をサポートする体制を整え、情報共有の機会を増やす教育相談体制の全体的な整備を行った。どういった対応を、誰が行うか、どのように情報共有を行うかなど、関わる人数を増やししながら、

知恵を出し合いながら対応できる体制を整えている。情報共有の際にはスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、心のケア支援員の先生にも参加していただくこともある。②必要に応じてケース会議も行っている。その際、県立気仙沼支援学校の先生などに協力をあおぐなど、外部との連携も増えてきている。③また、カウンセリングを気軽に受けるきっかけづくりとして、新入生に対しては、スクールカウンセラーの先生との全員面談を行っている。これによりスクールカウンセラーの先生とうまくつながったケースは多くある。

特別なことを派手にやっていけるわけではないが、生徒が相談できるチャンネルを増やし、情報共有しながら教職員全員がチームになって丁寧な対応を今後も続けていきたい。

4. 取り組みによる変化と課題

下図は平成 27 年度からの生徒数と長期欠席(年間 30 日以上)の生徒数の推移である。



授業や教育相談の体制が整ってきた平成 29 年度前後を境に、生徒数が増加の傾向、長期欠席者が減少傾向に転じている。またそれに伴い、中学校からの本校に対する意識も変わってきていて、入試直後や夏休みに行っている中学校訪問でもポジティブな情報交換ができるようになってきたところである。しかし、不登校傾向のある生徒を学校に向かわせる指導がうまくいっている一方で、卒業後の進路指導をいかに充実させていくかが今後の課題である。生徒数が増える中で、生徒の実態に合わせた丁寧な進路指導を目指して、学校全体で取り組んでいきたい。